

(明科町の埋蔵文化財第13集)

USHIO SHINMEIGUMAE

潮神明宮前遺跡Ⅱ

—町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—

2005. 9

明科町教育委員会

(明科町の埋蔵文化財第13集)

USHIO SHINMEIGUMAE

潮神明宮前遺跡Ⅱ

—町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—

2005. 9

明科町教育委員会



東・西周溝内出土遺物



石室内出土遺物

序

潮神明宮の周辺には、昔から古墳がいくつか存在することで知られており、明科町内でも重要な遺跡であると考えられてきました。

平成10年に明科町総合福祉センターあいらすの建設に伴い発掘調査（潮神明宮前遺跡Ⅰ次調査）が行われましたが、その結果新発見の古墳2基（潮神明宮6号墳・7号墳）と平安時代の住居址34軒、同時代の土器等が発見され改めて遺跡の重要性が認識されました。

今回同センターあいらすへの道路拡幅工事が計画され、事前の試掘調査によって古代の遺構が確認されたため、発掘調査が実施されました。

約225㎡を調査した結果、7世紀後半～8世紀初頭の古墳（潮神明宮8号墳）が1基と平安時代後半の住居址1軒、土塚1、溝址1などが検出されました。それに伴って、古墳の周溝からは須恵器、石室からは、勾玉、金環といった副葬品が出土しました。また住居址からは土器が出土しました。Ⅰ次調査の成果と合わせて、潮神明宮前遺跡の理解を深める上で大変貴重な成果が得られたと言えるでしょう。

発掘調査には多くの時間と費用・労力が費やされますが、先人の残した文化財を保護し、後世に伝えていくことは、我々に課せられた重要な責務と考えて、皆様のご理解をたまわりたいと思います。

最後に、調査にあたり周辺の皆様のご協力に感謝するとともに、調査員の先生方、発掘作業員の方々、関係各位にお礼申し上げます。

平成17年9月

明科町教育委員会

教育長 菅沼 完二

例 言

1. 本書は、明科町総合福祉センターあいりすへの道路拡幅改良工事に伴い、明科町教育委員会が実施した明科町大字東川手瀬所在の瀬神明宮前遺跡第2次調査報告書である。
2. 現場での発掘調査は平成17年5月16日から6月2日にかけて行い、起債事業により実施した。
3. 調査は明科町教育委員会が主体となり調査団を組織し調査を実施した。
4. 本書の作成における作業分担は次のとおりである。
 - ・遺構 測 量 山越正義、今村 克、堀 久士、荒井留美子、笹井朱鷺子、細尾みよ子
道浦久美子
 - トレース 今村 克、清水温子、藤原誠子、細尾みよ子
 - 写 真 山越正義、堀 久士
 - ・遺物 洗滌・注記・復元
清水温子、藤原誠子、細尾みよ子
 - 実 測 今村 克
 - 写 真 榑鬼灯書籍
 - ・編集 今村 克、請地 誠第1章の執筆は山越正義が行い、編集は今村 克、請地 誠が行った。
5. 測量用基準杭および調査グリッドの設置については、深志測量㈱へ依頼した。
6. 遺構の実測については、一部について写真実測を行い、(株)東京航業研究所へ依頼した。
7. 古墳石室より出土した金属製品の保存処理を峠山梨文化財研究所に依頼し、報告及び考察を4頁～8頁に掲載した。
8. 土器の実測図で、断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器で、灰軸陶器は断面にスクリーントーンを貼った。同じく黒色土器にはを内面に貼った。
9. 本調査の出土品、諸記録は明科町教育委員会が一括保管している。
10. 発掘調査・報告書作成にあたり次の諸氏・諸機関にご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表する次第である。
峠山梨文化財研究所 (畑 大介、鈴木 稔)、山田真一、山本紀之

目 次

口 絵

序

例 言

目 次

調査日誌・調査体制

第1章 遺物と遺構..... 1

1. 調査の概要..... 1

2. 調査結果..... 1

長野県明科町瀬神明宮前遺跡Ⅱ出土金属製品の保存処理について..... 4

1. 耳環..... 4

2. 鋳頭..... 4

3. 鉄刀中茎..... 5

報告書抄録

調査日誌

- | | | | |
|----------|-----------------|----------------|---------------------------|
| 5月6日(金) | 重機を使用してトレンチを入れる | 5月26日(木) | 東周溝・1号住居址調査 |
| 5月11日(水) | 重機による掘削 | 5月27日(金) | 全景写真撮影 |
| 5月12日(木) | 重機による掘削 | 5月28日(土) | 周溝内遺物について図化後取り上げ |
| 5月16日(月) | 検出作業・排水作業 | 5月29日(日) | 北壁土層断面図作成 |
| 5月17日(火) | 排水作業 | 5月30日(月) | 1号住居址測量：図化・石室調査 |
| 5月18日(水) | 周溝調査・土層観察 | 5月31日(火) | 1号住居址調査・石室調査 |
| 5月19日(木) | 周溝調査 | 6月1日(水) | 1号住居址調査・石室調査 |
| 5月20日(金) | 周溝調査・測量作業 | 6月2日(木) | 写真測量 |
| 5月23日(日) | 1号住居址調査・石室調査 | 6月6日(日)～30日(木) | 石室内から採取した土の洗浄および出土遺物の整理作業 |
| 5月24日(火) | 石室調査 | | |
| 5月25日(水) | 西周溝・石室調査 | | |

調査体制

調査団長：菅沼完二（明科町教育長）

調査員：山越正義（明科町文化財調査委員）

関 全壽（長野県考古学会員）

今村 克（長野県考古学会員）

調査補助員：荒井留美子、笹井朱鷺子、藤原誠子、細尾みよ子、道浦久美子

協力者：伊藤文男、内川康子、大月利夫、小林善樹、清水温子、高橋政保、竹村弘、宮沢芳次

事務局：明科町教育委員会生涯学習課 課長 横山良子、係長 請地 誠

第1章 遺物と遺構

1. 調査の概要

この調査は明科町社会福祉センターあいりすへの国道19号線からの町道拡張工事により発掘調査が生じたものである。

道路沿いの田と町道間にL字工を設定する為道路面より1.25m下げることになり、225㎡の範囲での調査となる。

先年、町社会福祉センター建設の際の調査で2基の古墳や多数の住居址が確認されていたのでわずか数十m離れた当調査地での遺構、遺物の出土の期待が大きかった。はからずも大きな岩石に当たり、調査地の断面には石室の両壁の石組みが見え古墳の姿が現れ始めていた。また、これを中心とした東西2ヶ所の調査面にも頭大の岩石が幾つか見え周溝と推定された。更に、国道寄りにも赤く焼けた半円を描く輪郭線（カマド跡）が浮かび出ており平安の住居址と期待された。

2. 調査結果

(1) 墳丘

調査地は現在田地であり、以前は畑が耕作されていた。早い時期からの耕作地であり、既に削平されていて、石室は残存部分が深さ40cm余の東西に延びる側壁と床部分のみである。従って、墳丘の全貌を描くのは非常に困難である。約10m離れた地に経塚があり、こぶし大から頭大の石が高く盛り上げられている。おそらく墳丘を形成していた岩石や石室の石は現在の塚や他に利用されたりして移動を余儀なくされているものと思われる。

墳丘の形や規模については石室や周溝の在り方、遺物、平面図の上から直径15、6mの古墳後期（7世紀末）の群集墳を構成する円墳ではないかと思われる。

(2) 石室の構築状況

石室遺構の残存部は長さ5m余である。北側部分は用水路と道路に懸かり調査不能である。南側部分はL字工設置部分であり、重機使用の際羨道部入り口と思われる岩石が移動され現在位置が不明確となり図示されていない。遺構内部は幅1.3m（両壁間）をもつ玄室と幅1.1mの羨道部から成る。

側壁 東側側壁と西側側壁では石質と規模が異なる。西側側壁は主として砂岩（風化が激しい）であり、一部欠損部分があるが1列に配置されている。東側側壁では主として硬砂岩を使用、意図的に2列に配置されている。壁高は40cm（残存部）であり、一部2段積みである。隙間にはこぶし大の石が詰められている。

床面 全面的にこぶし大の平石類が隙間なく敷き詰められている。（一部頭大に近い平石が使われている）これ等は玄室部分のみに敷かれたものであり、羨道部には無い。玄室部と羨道部は明確に境される。

羨道 幅は玄室部より20cm狭めている。入り口に近い位置には大岩が列からはみ出して置かれている。その傾きの様子やその下に挟まれる1個体の坏の状況などから後日に構築当時の位置からずれたものと判断される。従って、石室は片袖形式のものと考えられる。

羨門に当たる部分と思われる岩石は2個重機使用の際移動があり明確さを欠くのが惜しい。

(3) 周溝

調査地幅2mの範囲に2ヶ所の遺構が確認された。東側周溝と西側周溝部分である。それらは石室を取り巻く一連のものである。

東側周溝は幅約2m、石室の床面上部より最深部が45cmである。溝内の岩石や遺物も西側のものに比べて非常に少ない。須恵器の坏蓋や坏身が出土している。また、馬歯が1頭分出土し、周辺からも骨片が分散して出土している。

西側周溝は幅約3m余、石室床面上部より最深部が60cmである。こぶし大から人頭大以上の岩石が多数検出された。更に、岩石の下には破損はしながらも一括になる須恵器がまとめて15個程（高坏、長頸壺、平瓶、はそう、坏、蓋坏、提瓶等）出土している。遺物は7世紀末のものであり、中には他地域から搬入されたと思われる器も認められる。それらはあたかも墓前祭直後、周溝に投げ入れられたものごとく1ヶ所に集中している。また、東側周溝内と同様に周溝の外縁部周辺にも馬歯が2ヶ所にわたってかなりの量が出土している。

以上、二ヶ所にわたる周溝は前庭部を中心に置き、左右に石室を囲むように円形に築かれた一連の古墳の周溝であり、おそらく前庭部に近い西側周溝部分に墓前祭に使われた器はまとめて投入されたものと思われる。

(4) 遺物出土状況

限られた調査範囲なので全体傾向にはふれられないが限定された出土遺物からその傾向をとらえたい。

石室内からは装身具、周溝内からは供膳具が多く出土している。副葬品としての装身具は玄室内にあり、それも中央部辺に離れて出土している。まず、瑪瑙製品として勾玉1個（後日石室内の土を洗い出す際に更に1個採取）それに耳環1個（金銅製）、切子玉1個（水晶）である。これ等は石室の床面上20cm上ほぼ同一面に納置されていたものである。更に金属片が2個、1つは鉄製品（刀の中茎）であり、いま一つは鉄頭と思われる金属片が1個装身具と同じレベルから出土している。また、石室内の土を洗う際には濃紺の丸玉2個（径11mm）と同色の白玉6個（径10mm）、それに同色のガラス小玉が計104個（径4mm）が採集されている。これらのガラス製品は小玉は発掘時には見出せなかったが土の水洗時にたくさん発見された。

他の遺物としては羨道部にあって1つの大きな岩石が場を占めており、この岩石の底部辺部に小盤が底部を上にして大岩の下に挟まれていた。この状況から判断して側壁の大岩が転倒してずれを生じたものと考えられる。従って、副葬品としての器はただ1個体が確認されただけである。この場合墓室内が荒らされたと考えられないので或いは身分に相応しい装身具だけを着けて埋葬し、生活用具等は形だけに留めたものと思われる。

(5) 1号住居址

限られた調査地内の遺構になるので不明ことが多い。表土削平中黒褐色土の落ち込みとカマドの黄褐色の弧状輪郭が確認された。

検出 C2、C3グリッドにある。

規模・形状 一方の軸が約4.9mであり、その形状については隅丸の方形に近いものと考えられる。

埋土 炭化物の混じった黒褐色土の単層である。

床面・壁 調査地の南、北側の用水路と田の水が染み出し、床面は調査時には常時湿り、泥状を呈しているため硬化面が確認できず床面の状況把握は非常に困難である。壁は一部が表出しているばかりで不確かであるがその立ち上がりは急である。

カマド 東壁の北側にあり、張り出して構築されている。残存状態は良好である。煙道の痕跡は確認できない。両軸の内部は深さ20cmであり、焼土に埋れ赤く焼けた角柱状の石が1個入る。他に丸みを帯びた石が2個後から投げ入れられた状態である。廃屋の時点でカマドに入れられたものだろうか。炊き口の前部には約20×40cm大のやや平板な石が置かれ床とカマドとを区切っている。この周辺には炭化物と焼土に混じって土師器片が点々としている。支柱穴は1個確認されるが他は未検出である。(泥地のため確認できない)

遺物の出土状況 床面から10cm程の上部に灰釉陶器片が数片とカマドの周辺から黒色土器片が出土している。床面には小さな土師器片が出土している。底部片や口縁部片でいずれも細片が多い。

遺物 土師器皿、灰釉陶器片、黒色土器片、須恵器片数点

時期 平安時代9世紀半ばから10世紀

1 金属、石製隨身具

No	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	現重量(g)	孔径(mm)	材質	図版番号
1	耳環	25	23	7	9.5	—	金鋼	口輪
2	勾玉	38	22	10	11.0	2	瑪瑙	第16図4
3	勾玉	33	20	9	9.4	2	瑪瑙	第16図5
4	切子玉	30	18	30	9.9	5~2	水晶	第16図6

2 ガラス製玉類

No	分類	色	最大長(mm)	最大厚(mm)	現重量(g)	孔径(mm)
5	丸玉 No.1	B	11	8	1.6	5~3
6	No.2	B	11	8	1.4	5~3
7	白玉 No.1	B	10	8	1.0	2
8	No.2	B	9	5	0.7	2
9	No.3	B	10	6	1.1	2
10	No.4	B	9	5	0.8	2
11	No.5	B	8	4	0.6	2
12	No.6	B	8	6	0.6	2
13	小玉 No.1	B	4	3	0.1	1
14	小玉 No.2	B	4	3	0.1	1
15	小玉 No.3	B	4	3	0.1	1
16	小玉 No.4	B	4	3	0.1	1
17	小玉 No.5	B	4	3	0.1	1
18	6~104	B				

3 金属類

No	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	現重量(g)	孔径(mm)	材質
1	鉄刀中茎	46	20	14	20.6		鉄
2	銅環	11	10	3	1.0		鉄

長野県明科町潮神明宮前遺跡Ⅱ出土金属製品の保存処理について

駒山梨文化財研究所 鈴木 稔

明科町潮神明宮前遺跡Ⅱで出土した金属製品3点について、保存処理を実施したので以下に報告する。金属製品は耳環、鋳頭、鉄刀中茎（部分）の3点である。

1. 耳環

青銅に金銀合金の薄板を貼った耳環で、「金環」と称される一種である。

処理前：青銅内部の劣化がはなはだしく、腐食生成物が内側から外殻を押し広げた結果、大きく破損していた。触ることも困難な状態で、写真も片面しか撮影できなかった（写真1）。X線写真は強弱2段階の照射量で撮影し、劣化が内部にまで進行していることを確認した。

安定化・強化処理工程：きわめて脆いので表面の土を軽く除去したのみですぐに錆の安定化処理をおこなった。安定化処理はベンゾトリアゾールの約2%エタノール溶液に減圧下で1週間浸すことで実施した。そのあと、60℃の恒温乾燥機に入れて充分乾燥させてから強化と表面保護のためアクリル系樹脂「パラロイドB-72」のアセトン溶液に1昼夜減圧含浸し乾燥させた。次に、破片をエポキシ系接着剤「アララナイト・ラビッド」で接合した。また、欠損部分が大きく強度不足が懸念されたため、エポキシ系充填剤「XNR6105/XNH6105補修用人工木材エポキシレジン」で補填・整形した（写真2）。

クリーニング工程：クリーニングに耐えられる強度が得られたと判断されたので次工程に進んだ。精密グラインダーおよびアート用カッターナイフで表面の土、青錆を除去し、比較的残りの良い部分については青銅の上に貼った金銀合金の薄板を露出させることができた。ただし、耳環の両端部をはじめ劣化により薄板が失われた部分もかなりある。

仕上げ工程：全体に「パラロイドB-72」のアセトン溶液を塗布した後、「アララナイト人工木材」で補填・整形した部分をアクリル絵具で補彩した（写真3）。補彩は展示した場合あまり不自然でなく、かつ注意して観察すれば補彩部分が容易に識別できる程度にとどめた。処理後写真および実測図をとった。

所見：耳環の表面に貼られた金銀合金の成分分析は実施していないが、色調から見てかなり銀を含んでいるものと思われる。

2. 鋳頭

鋳頭に似た鉄製の半球に銀の薄板が貼られ1本の足が付いたもので、仮に鋳頭と呼んでおくが、真の用途は不明。

処理前：処理前写真（写真4・5）および強弱2段階の照射量でX線写真撮影をした。銀薄板の上まで鉄錆が覆っており、銀は部分的に露出しているのみである。

安定化・強化処理工程：安定化処理は上記の耳環と同じ。60℃の恒温乾燥機に入れて充分乾燥させてから強化と表面保護のためアクリル系樹脂「パラロイドB-72」のアセトン溶液に1昼夜減圧含浸し乾燥させた。

クリーニング工程：足部分にひびが入っていたので安全のため足が中に入るような木製の支持台を作成してこれに「セメダインC」で接着固定した。そのうえで、銀の薄板上に吹き出た鉄錆をミニ・グラインダーで除去した。次に、接着部をアセトンでほどき、紙の内側を同じようにクリーニングした。

仕上げ工程：全体に「パラロイドB-72」のアセトン溶液を塗布した。処理後写真および実測図をとった。所見：裏側から観察すると、現存している足の対称位置に突起物が失われたような痕跡が見られ、足は2本であったと考えられる。銀の薄板は地の鉄が腐食して膨張したのについてゆけず鳥状に分かれてしまったが、そのぶん地との密着は良好で剥落は見られない(写真6)。使用された銀の成分分析は実施していないが、色調からかなり純度の高いものと推測される。裏側にまで回っている銀板端部の形状から見て、用いられた銀板は比較的無造作に裁断したもので、特に鋸頭の形状に合わせたものではないようである(写真7)。

3. 鉄刀中茎 (部分)

刀の中茎部分の破片が錆のため大きく変形したものを。

処理前：処理前写真(写真8)および強弱2段階の照射量でX線写真撮影をした。X線写真から中茎と錆の分離が可能であることを判断した。

保存処理工程：内部に塩類が残っていると腐食が進行するのでこれを除去し、安定化させるため高温高圧下で純水を用いて脱塩処理をおこなった。60℃の恒温乾燥機中に入れて充分乾燥させてから、錆部分を切断除去し整形した。次に、強化と表面保護のため非水系アクリルエマルジョン樹脂「NAD-10」を用いて減圧含浸し、乾燥させた。処理後写真(写真9)および実測図をとった。

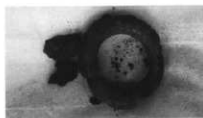


写真1



写真2



写真3



写真4

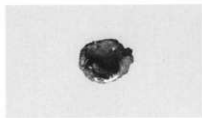


写真5



写真6



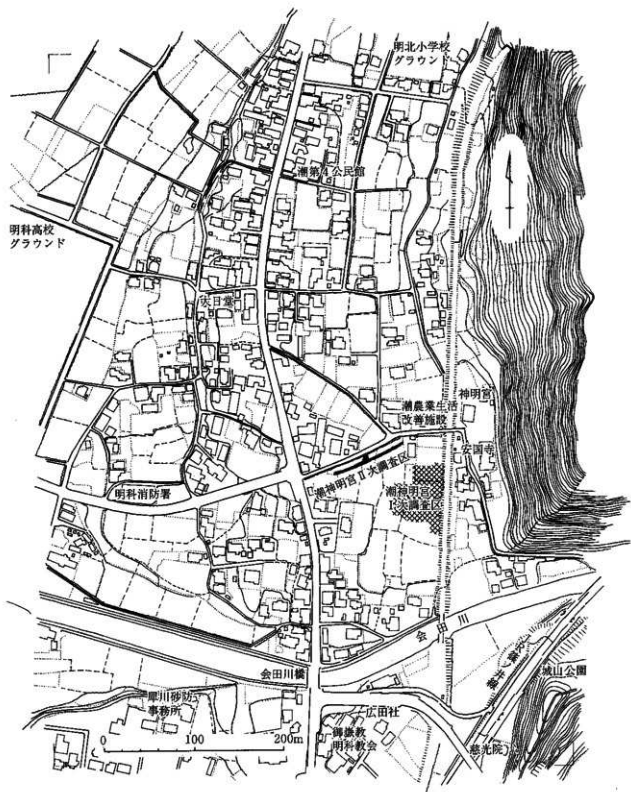
写真7



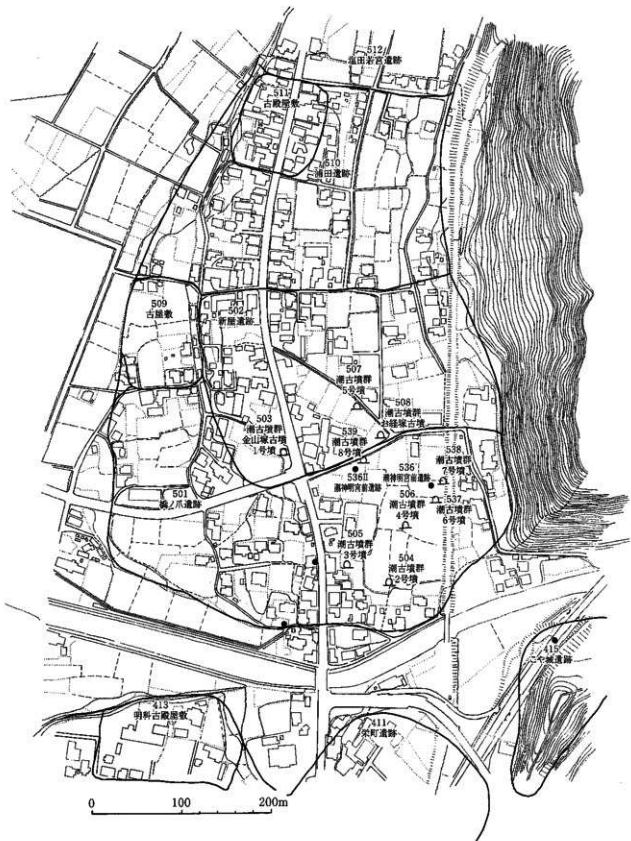
写真8



写真9



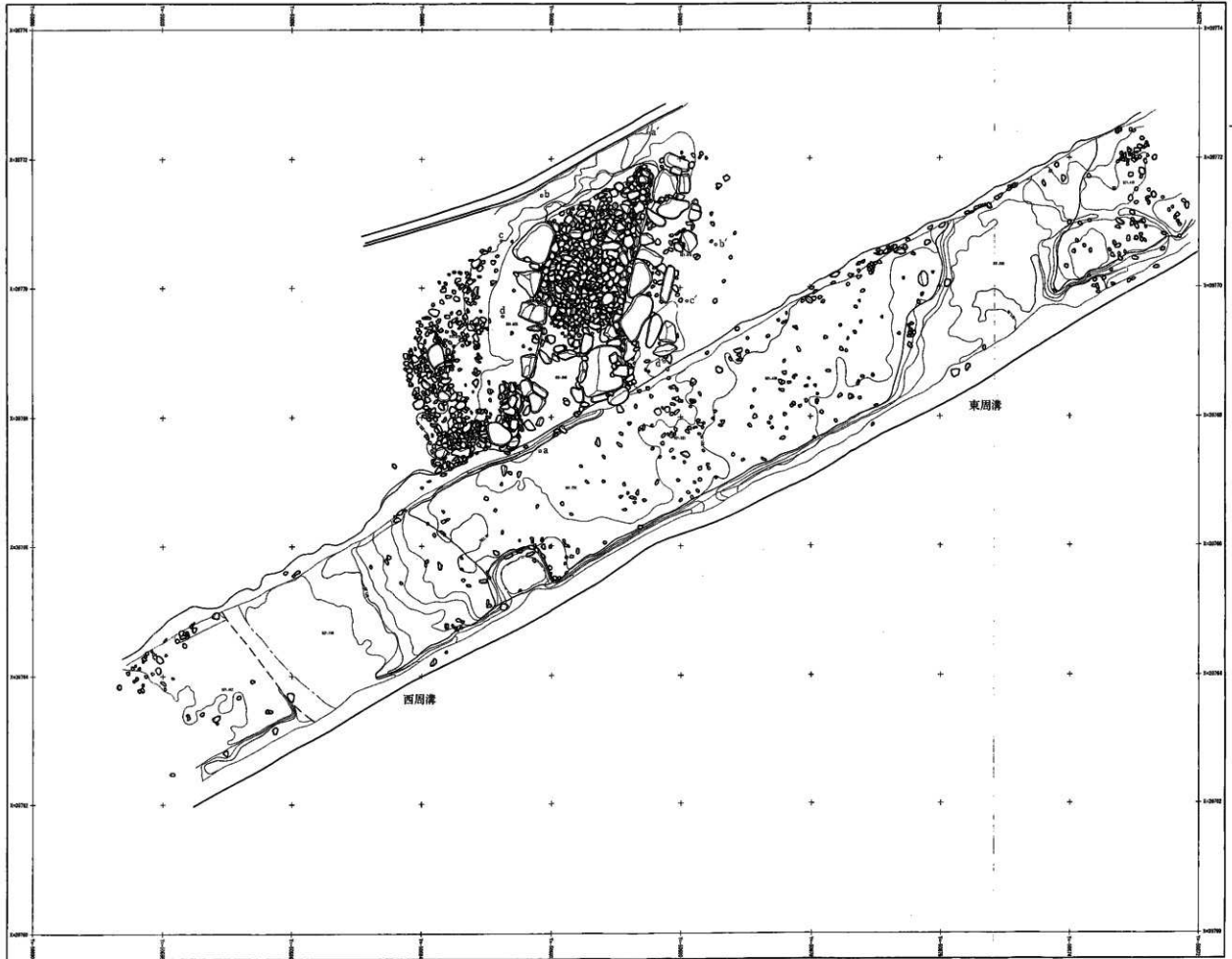
第1図 調査位置図



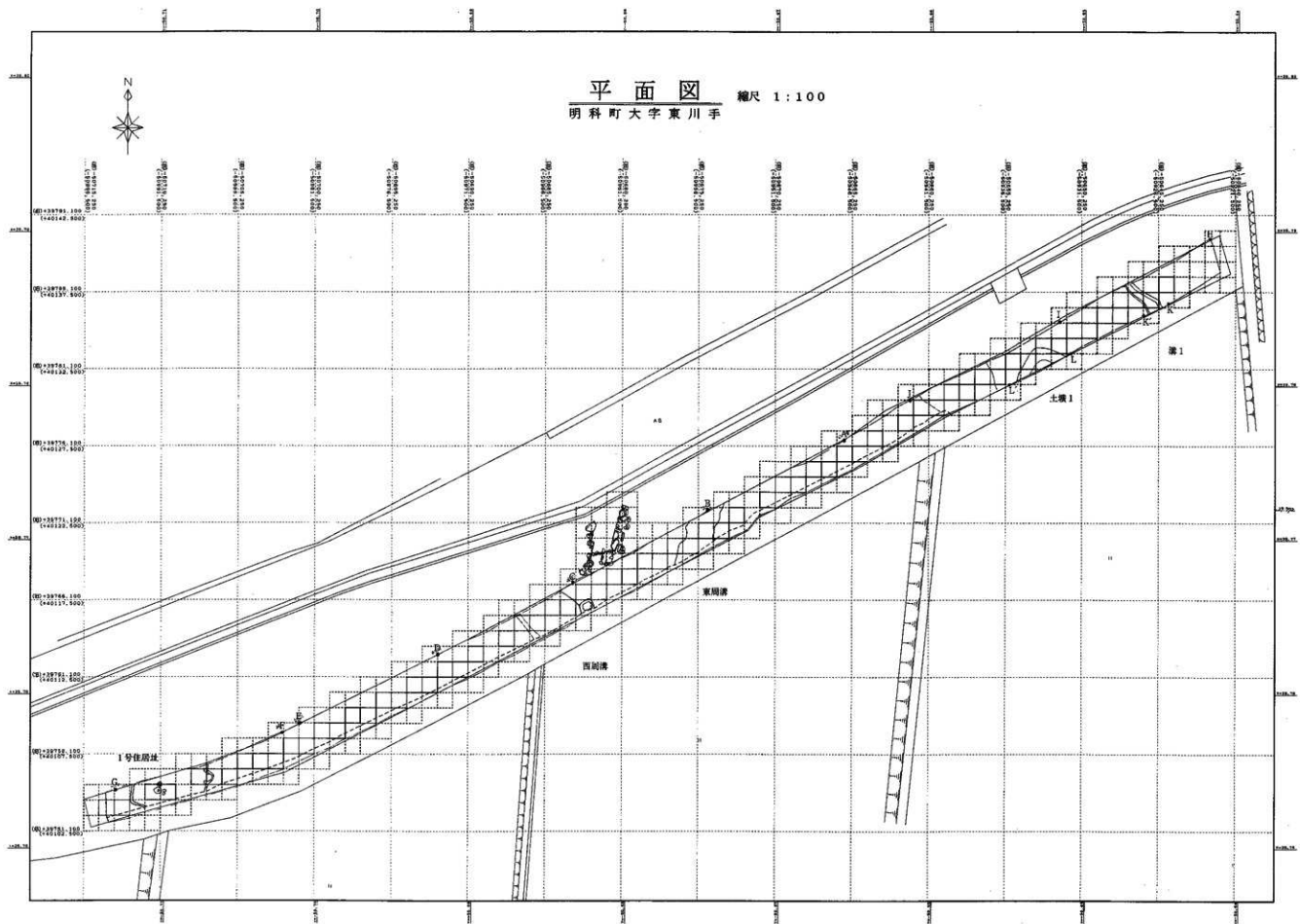
第2図 周辺遺跡図

周辺遺跡図 付表

遺跡番号	遺跡名	類別	所在地	立地	調査	調査年度				調査者	備考	
						昭和	平成	文	景			
501	丸ノ爪遺跡群 丸ノ爪	集落	栗川手	栗川段丘 宅地	田							昭和56年の国道工事で遺跡が発見。 今州の東で、津川川に架かるたの遺跡が、跡の跡に多量の見られた。
502	彌生	散	＊	栗川段丘 宅地	田							栗ノ爪遺跡に連続した遺跡。 住毛遺跡跡に遺跡が出土している。
503	彌生群1号墳 (金山東古墳)	内墳	＊	栗川段丘 宅地	田							明治末にはほとんど破壊、礎石のみ遺存。 重刀ノ子、曹、須賀野が出土している。
504	2号墳	古墳	＊	栗川段丘 田	田							田の中におよむ外に盛り上げがあり、現在は高塚になっている。
505	3号墳	古墳	＊	栗川段丘 田	田							2号古墳の南50mにわずかの発掘の上におおむねある。
506	4号墳	古墳	＊	栗川段丘 田	田							2号墳の北50mに小溝があり、周辺がわずかに盛り上げられている。
507	5号墳	古墳	＊	栗川段丘 田	田							お経塚古墳の北40mほどに径5mほどのマウンドがあり、墳頂部に碑が建っている。
508	丸ノ爪遺跡群 古墳群	古墳	＊	栗川段丘 墓場	田							河原石を積み上げた径6mの円環。 一字一石距離以上の広さもある。
509	彌生群 古墳群	墳墓	＊	栗川段丘 田	田							開削の発掘の調査があったといわれ、かつては土器も集っていたという。
510	津田	散	＊	栗川段丘 宅地	田							墓ノ爪、須賀、栗田若古遺跡と一体となった遺跡。
511	古館遺跡	墳墓	＊	栗川段丘 宅地	田							長次郎墓の地名が残る。
512	畑田若宮	集落	＊	栗川段丘 宅地	田							
513	彌生群 古墳群	集落	＊	栗川段丘 宅地	田							昭和55年小学校建設時、44年古墳センター建設時にかかり破壊された。遺跡中間の配石らしい遺構も見つかっている。
514	彌生群 古墳群	集落	＊	栗川段丘 宅地	田							平成10年総合福祉センター建設に伴う発掘調査で見見。
515	彌生群 古墳群	集落	＊	栗川段丘 宅地	田							
516	彌生群 古墳群	集落	＊	栗川段丘 宅地	田							
517	彌生群 古墳群	集落	＊	栗川段丘 宅地	田							
518	彌生群 古墳群	集落	＊	栗川段丘 宅地	田							
519	彌生群 古墳群	集落	＊	栗川段丘 宅地	田							平成17年町道建設に伴う発掘調査で見見。
520	彌生群 古墳群	集落	＊	栗川段丘 宅地	田							



第3圖 8号古墳平面圖

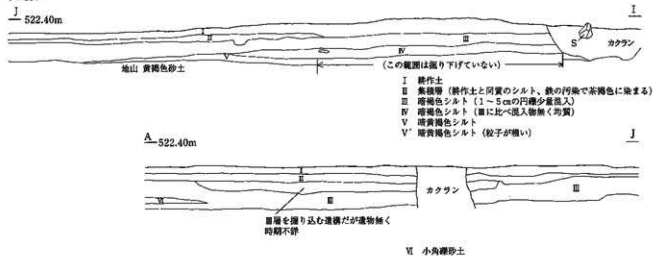


第4区 遺構配置図

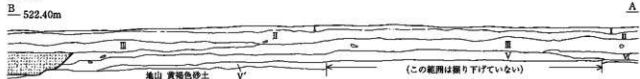
下に続く



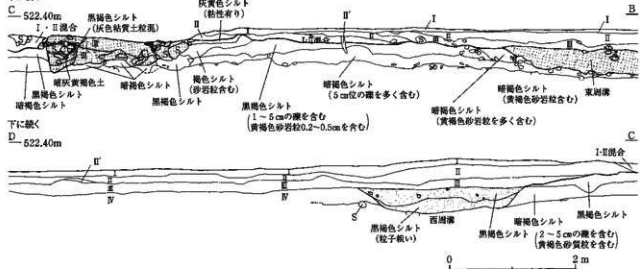
下に続く



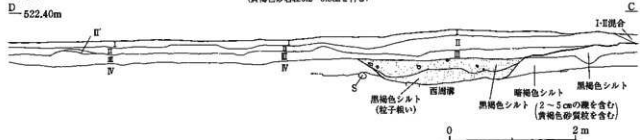
下に続く



下に続く



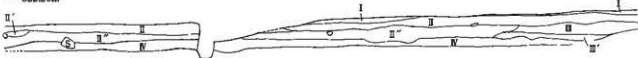
下に続く



第5図 調査区北壁土層図①

下に続く

E 522.20m



F E



下に続く

— 522.20m



- I 耕作土
- II 黒炭層 (耕作土と河質のシルト、鉄の汚染で茶褐色に染まる)
- II' * (IIより粒子粗い)
- III * (II'よりさらに粒子粗い、0.5~1cmの黒褐色粒多く含む)
- III' 暗褐色シルト (1~5cm円礫少量混入)
- IV * (III'より1~5cm円礫多量混入)
- V * (III'に比べ混入礫無く均質)
- V 暗黄褐色シルト

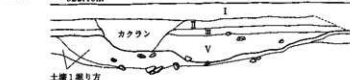
G 522.20m



溝 1

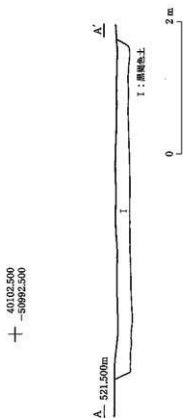
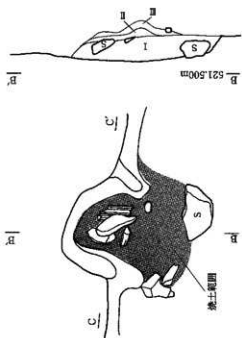
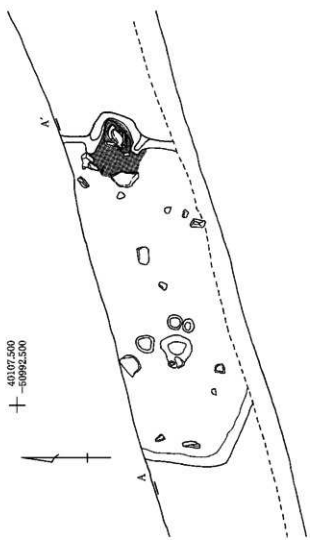


土壌 1 L 522.40m

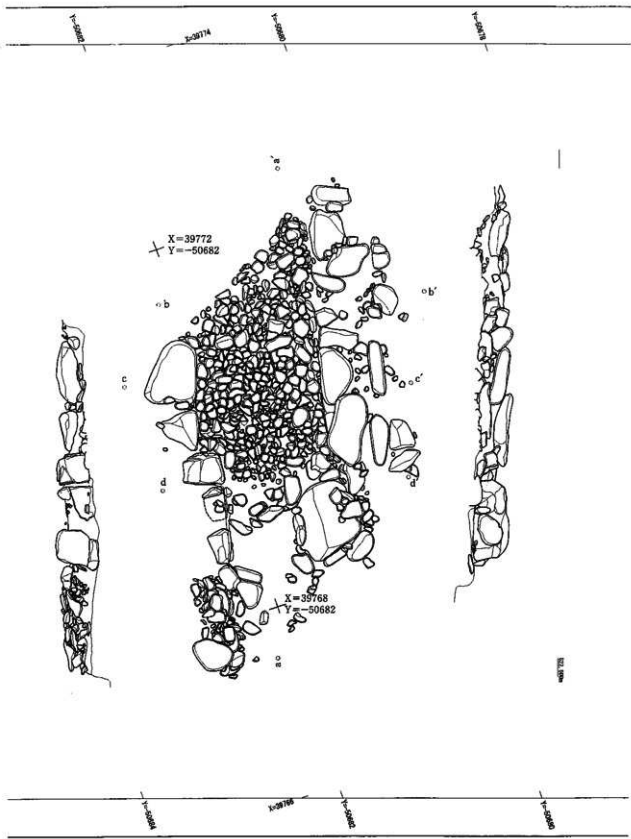


0 2m

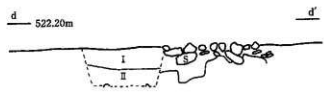
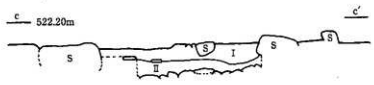
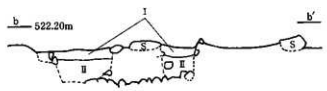
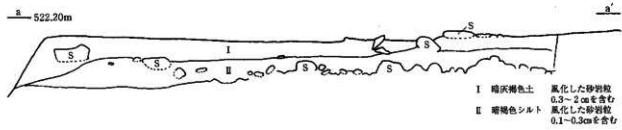
第6図 調査区北壁土層図①・溝1・土壌1土層図



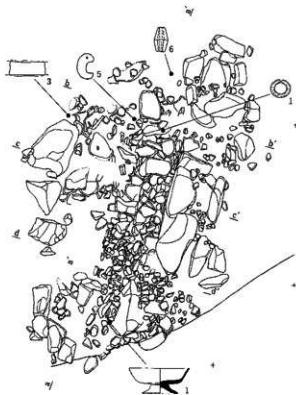
第7图 1号住居址



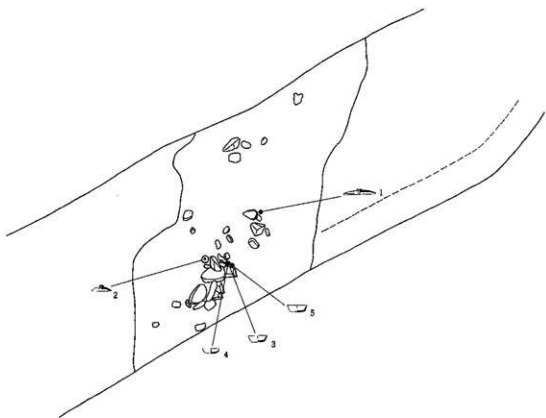
第8图 石室平面图·断面图



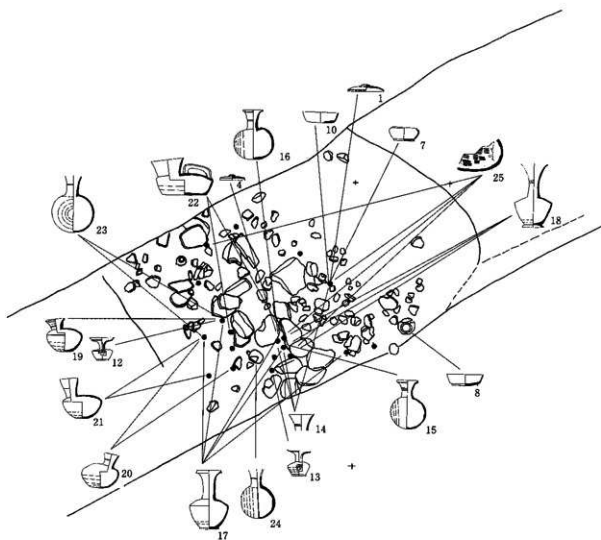
第9図 石室断面図



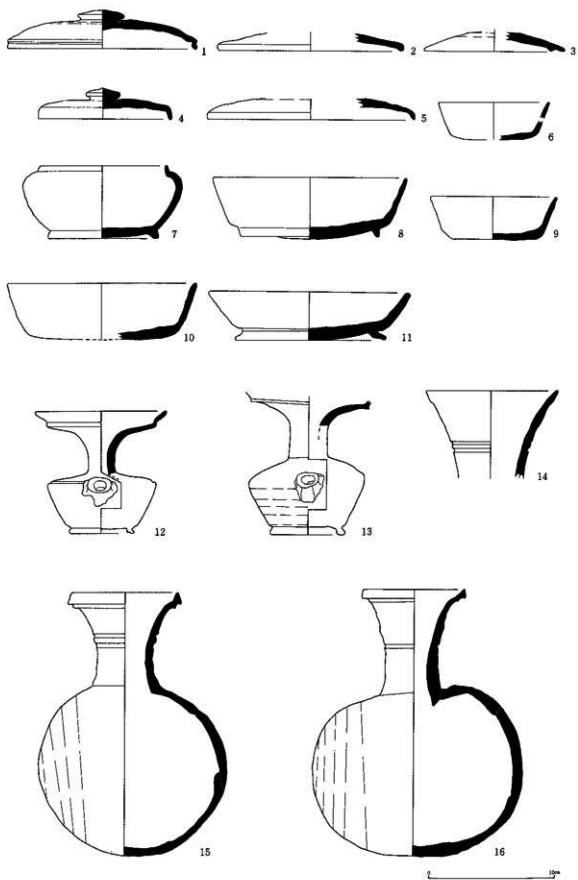
第10圖 石室・羨道部遺物出土圖



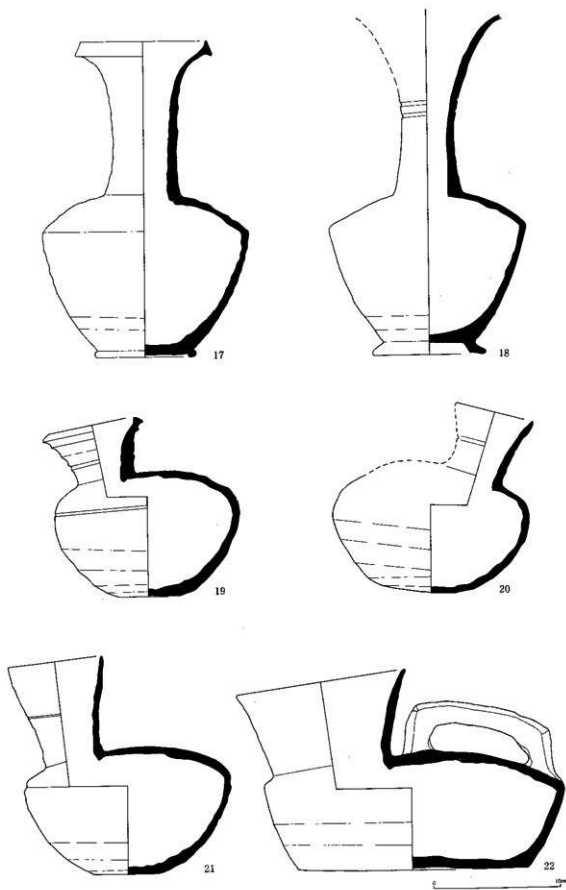
第11圖 東周溝遺物出土圖



第12圖 西周濬遺物出土圖

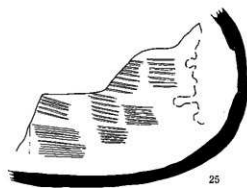
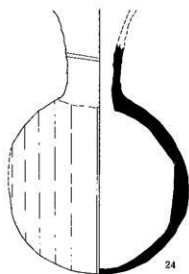
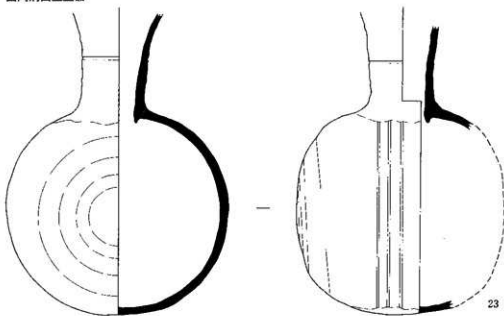


第13图 西周淳出土土器①

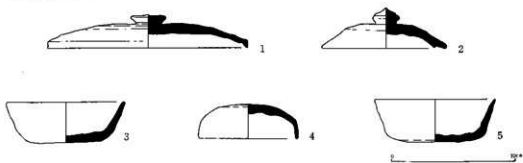


第14图 西周濠出土土器②

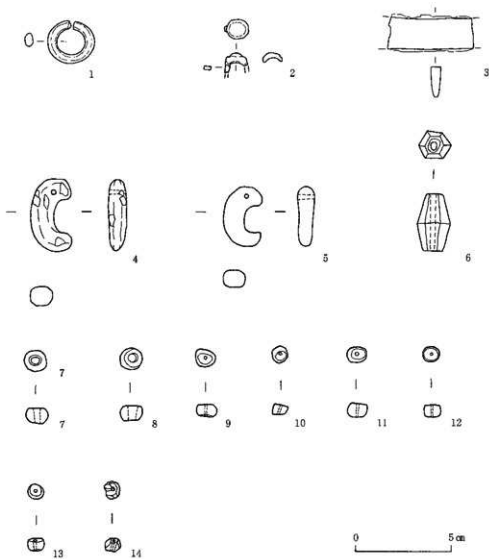
西周清出土土器



東周清出土土器



第15圖 西周清・東周清出土土器③

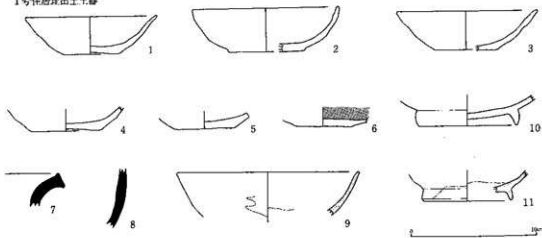


第16图 石室出土遺物

狭道部出土土器



1号住居址出土土器



第17图 狭道部・1号住居址出土遺物

図版 1



調査区全景 (西より)



8号墳 (東より)



8号填石室（调查途中経過）



8号填石室全景



阿西風溝



西原溝電物出土状況



8号墳東周溝



西園津遺物出土状況



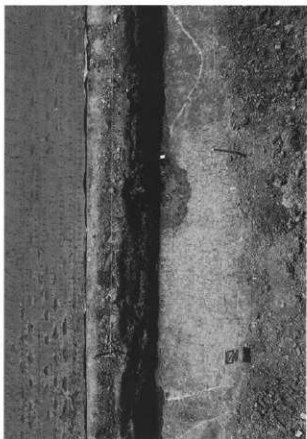
1号住居基全景(南より)



1号住居基カマド



1号住居基全景(西より)



溝1・土竈1全景(北より)



第17图 黄道部出土土器 1



第15图 24



第14图 20



第13图 16



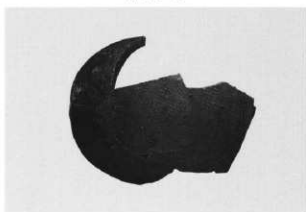
第14图 21



第14图 19



第14图 22



第15图 25



第13图 1



第13图 4



第13图 11



第13图 7



第13图 8



第13图 9



第13图 12



第13图 13



第14图 17



第15图 23



第14图 18



第13图 15



東周溝出土 (第15圖 2)



東周溝出土 (第15圖 5)



東周溝出土 (第15圖 3)



東周溝出土 (第15圖 4)



1号住居址出土 (第17圖 1)



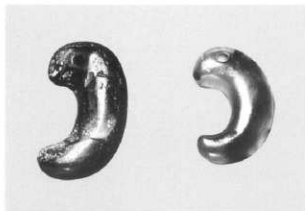
1号住居址出土 (第17圖 2)



1号住居址出土 (第17圖 11)



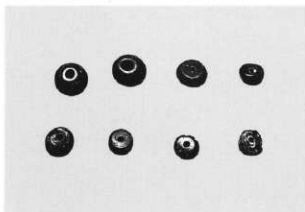
1号住居址出土 (第17圖 10)



(左：第16図 4 右：第16図 5)



(第16図 6)



(第16図 7~14)



口絵下中央



(第16図 1)



(第16図 3)



第16図 2 (上から)



同左横から

報告書抄録

ふりがな	うしおしんめいぐうまえいせきⅡ							
書名	潮神明宮前遺跡Ⅱ							
副書名	町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	明科町の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第13集							
著者名	山越正義、今村 克							
編集機関	明科町教育委員会							
所在地	〒399-7102 長野県東筑摩郡明科町大字中川手6824-1 TEL (0263) 62-3001							
発行年月日	2005年9月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うしおしんめいぐうまえいせき遺跡 潮神明宮前遺跡	長野県東筑摩郡明科町大字東川手	20441		36° 21' 25"	137° 56' 08"	2005.05.16 ～ 2005.06.02	225㎡	町道拡幅改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
潮神明宮前遺跡	古墳 集落址	古墳 平安	古墳 1基 住居址 1軒 土壇 1基 溝址 1基		須恵器、勾玉、 金属製品、土 師器	7世紀後半～8世紀初頭の古墳及び平安時代後半の住居址		

明科町の埋蔵文化財第13集

潮神明宮前遺跡Ⅱ

一町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書一

平成17年9月30日発行

編集・発行 明科町教育委員会
長野県東筑摩郡明科町
大字中川手6824-1

印刷 ほおずき書齋(株)
長野市梅原2133-5

